

トニオ・クレーゲル

子どもの頃、憧れのひとに近づきたくて近づけなかった、
そんな淡い思い出ありますか。

体育の時間に憧れの子を前に赤っ恥をかく辛さ、分かりますか。

20歳も過ぎて、初恋のほろ苦さを思い出し、なぜ自分はこんな性分なのだと考え込むことがありますか。

羨ましいアノヒトと自分との間の距離に悩み卑屈になったことのある人は、トニオ・クレーゲルの理解者になれるかもしれない。芸術家は、自分たちや作品を理解しない人々を一般ピープル、俗人だと軽蔑する。だが文学者トニオ・クレーゲルは、どうしても俗人たちへの愛を捨てきれない。たとえ俗人たちから、変人でツマラナイ怪しい人物と思われ続けても、彼らへの愛と憂鬱な羨望を憎悪に変えることなく筆をとる。「最も多く愛する者は、常に敗者であり、常に悩まねばならぬ」。20世紀ドイツ文学の巨匠トマス・マンが贈る、草食系青春小説の金字塔。

1月13日(水)の5限、読書会に集まれ!

トマス・マン

(1875 - 1955)

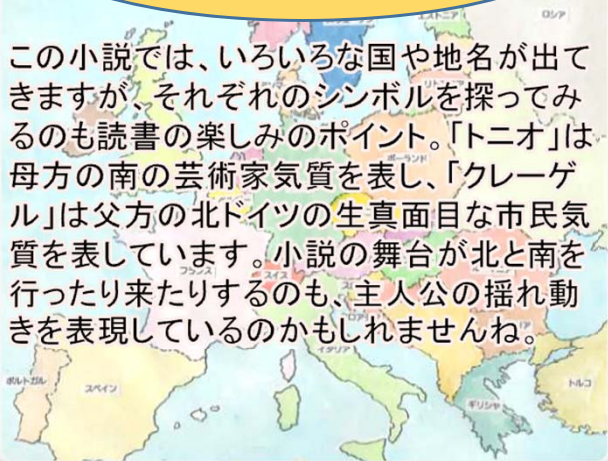
ノーベル文学賞を受賞したドイツの小説家。
『ヴェニスに死す』や『魔の山』で有名。

ナチス政権下では国外逃亡の憂き目にあうが、亡命先のアメリカ合衆国にて「どこでも私のいるところにドイツ文化がある」と述べたといわれ、戦前から戦後にかけてのドイツの教養文化を語る上で欠かせない人物。



ドイツ, イタリア,
フランス, デンマーク,
ロシア...

この小説では、いろいろな国や地名が出てきますが、それぞれのシンボルを探ってみるのも読書の楽しみのポイント。「トニオ」は母方の南の芸術家気質を表し、「クレーゲル」は父方の北ドイツの生真面目な市民気質を表しています。小説の舞台が北と南を行ったり来たりするのも、主人公の揺れ動きを表現しているのかもしれないですね。



読書会とは?

読書は、一人だけでおこなう作業とは限りません。同じ本を読んだ人同士で感想を共有し、あるトピックに関して議論をし、知見を深めていく、そのような場を「読書会」といいます。読書の習慣のない人も読書会に参加することで読書の面白さやコツに気づいたりできます。大学の「読書会」は、教養本から専門書まで様々な本を扱います。ぜひ、在学中に読書会への参加や企画をしてみてください!

